

(1)

昭和21年7月10日第3種郵便物認可

論

高校の卒業生へ

将来の活躍に期待

新型コロナウイルスの感染が拡大し、それに伴って紀南の多くの高校が卒業式を中止し、卒業証書だけを個々に授与した。

「卒業式が中止になってどう思うか」と、授与式の取材に行った先の卒業生に問い掛けると「残念だが、先生方は最善の対応をしてくださった。ある意味、自分たちが体験していない思い出になる」と答えてくれた。

急な旅立ちとなったが、卒業生らは現状を受け入れ、新生活へ旅立つ決意を込めて式に臨んでいるようで、頼もしく思った。

本紙では卒業に先立ち「旅立ちを前に」という連載を掲載。卒業を前にした田辺地域7校の生徒に

高校生活を振り返ってもらった。目的意識を持ち、自分の状況を客観的に見つめられる生徒が多く、将来が楽しみになった。

田辺工業高校の小川剛史君は勉学に励む中で「周囲の人への感謝や時間の大切さを知った」と語った。4月から編入する工業高等学校の授業に備えた勉強にも取り組んでいるそうだ。

田辺高校の黒崎裕貴君はキノコや変形菌の研究が趣味。彼が作製した標本を見せてもらって知識の多さに驚いたが、本人は「自分の知識はまだまだ」と謙虚な姿勢を崩さなかった。春からは大学で生物学の知識をさらに深めていくという。

神島高校の谷澤春香さんは、第1志望の大学に進学するという目標を明確にして受験勉強に集中。無事その大学に合格し、将来は地元特産の紀州材を使った文房具の商品を開発したいという。

熊野高校の寒川紫月さんは、部活動で地域のボランティア活動に励み、何事にも積極的に取り組めるようになった。外国語大学へ進学し、将来は海外で活躍する女性になりたいそうだ。

南部高校の山本葉月さんは学業で食品製造の基礎を学び、部活動にも全力で打ち込んで「やり残したことはない」と振り返る。春から製パン会社に就職する。

南部高校龍神分校の小川泰二郎君は野球部の主将を務めた。地元で応援してくれる人たちの存在があったから3年間頑張ってきたという。大学でも野球を続け、

「将来はプロ野球か社会人野球を目指したい」と思い描く。

南紀高校の笠松美徳君は別の高校を退学後、仕事を通して人の支えを実感。新たな自信が芽生えた。高校に入り直し「やるだけのことはやった」という達成感とともに卒業する。次の目標は4月からの就職先で店長になることだ。

本紙が募集した「卒業メッセージ」には、卒業生や在校生からたくさん感謝や激励の言葉が寄せられた。家族からは「社会に出たら厳しいことがいっぱいあると思うけど、毎日が勉強だと思って頑張って」というメッセージもあった。

くじけることがあっても、高校で培ったことを糧に乗り越えていけばよい。将来は自分の能力を十分に発揮、故郷を盛り上げてくれることを期待している。(Y)